

エドワード・ズウィック監督作品に見るマイノリティ表現

——『グローリー』から『ラスト・サムライ』まで——

岩 本 裕 子

キーワード : Edward Zwick, minority, September 11th

はじめに

- 1 ハリウッド映画に描かれる「日本」という文化
 - (1) 『ライジング・サン』と『パール・ハーバー』の日本イメージ
 - (2) ライシャワー教授の弟子ズウィック監督作品『ラスト・サムライ』
 - (3) 新渡戸稲造『武士道』から知る「名誉」
- 2 ズウィック監督作品から読む人種意識
 - (1) 騎兵隊後遺症の名誉回復映画『ラスト・サムライ』
 - (2) 対先住民政策抗議映画『レジェンド・オブ・フォール』
 - (3) 南北戦争第54黒人部隊映画『グローリー』
- 3 ズウィック監督の世界を見る「眼」
 - (1) 湾岸戦争のハリウッド初映画化『戦火の勇気』
 - (2) 「9月11日」予告作品『マーシャル・ロー』
 - (3) 明治維新・富国強兵から自衛隊イラク派遣まで

おわりに

註

【付録1】日本イメージを確認したいハリウッド映画一覧

【付録2】エドワード・ズウィック監督作品一覧

はじめに

「イラク戦争」開始4日後という緊迫の中で、開催さえ危ぶまれた2003年3月の授賞式¹と異なり、2004年の第76回アカデミー賞授賞式は穏やかに、和やかに、『ロード・オブ・ザ・リング／王の帰還』三部作の完結編（The Lord

of the Rings: The Return of the King) が11部門ノミネート、全部門最優秀受賞という快挙で終了した。

日本としては、映画『ラスト・サムライ』(The Last Samurai) の渡辺謙が助演男優賞にノミネートされたこと、外国語映画賞²に山田洋次監督の『たそがれ清兵衛』(Twilight Samurai) がノミネートされていたことで例年以上に注目された式典となった。前者は、『サヨナラ』(Sayonara:1957) で唯一オスカー像を手にした日本人ナンシー梅木(ミヨシ梅木)以来で47年ぶり、後者に関してはノミネートは『泥の川』(1981)以来22年ぶり、もし受賞していたなら『宮本武蔵』(1955)以来48年ぶりとなるはずであった。ちなみに梅木が受賞した1957年にアカデミー賞を総なめにしたと評価の残る『戦場にかける橋』(The Bridge on the River Kwai) で日本人将校を演じた早川雪舟³は、助演男優賞にノミネートされたが受賞は叶わなかった。

日本映画界からの解釈も可能だが、本稿はそれを意図しない。2004年3月のアカデミー賞では助演男優賞のみノミネートされたに過ぎなかったが、日本ではアカデミー賞が拍車をかけて話題となった『ラスト・サムライ』を手がかりとして、エドワード・ズウィック(Edward Zwick)監督の『ラスト・サムライ』に至る作品の数々を読み解いて、彼の製作視点からマイノリティ意識を検討することが目的である。

1952年にイリノイ州で生まれたズウィック監督は、1-(2)で後述するようにハーヴァード大学に進学後、日本研究の第一人者であり、ケネディ、ジョンソン両政権において駐日大使も務めたライシャワー博士(Edwin Oldfather Reischauer)の元で、日本文化を学んでいる。ハリウッド映画界では『きのうの夜は・・・』(About Last Night ...:1986)で長編監督デビューを果たした後、本稿で検討する諸作品を監督する他に、アカデミー賞の対象となる数々の作品をプロデュースもしている。

本稿ではズウィック監督作品を検討するに先立って、ハリウッド映画において描かれてきた「日本」という文化についても考えていきたい。すでに筆者はこれまで、本紀要を通じて、ハリウッド映画を研究対象とした論文を発

表してきた⁴。それらが基礎となって『スクリーン』三部作完結編として『スクリーンに投影されるアメリカ』（メタ・ブレーン、2003年、以下『投影』と略記する）出版にも至った。大統領、人種、民族、宗教、ニューヨークというテーマ設定の元、「9月11日」以降のアメリカを考えた試作である。

『投影』の人種を扱った第二部においては、コーカソイド系を主流とするアメリカ合衆国に生きる、モンゴロイド系とネグロイド系という二つの人種を検討した。ただ、モンゴロイド系とは言うものの、先住民のみを対象としていて、アジア系、中でも日系を対象とした研究は全く行ってこなかった。筆者にとっては盲点ともなる領域ではあるが、日系やアジア系に関しての研究をこれ以降も発展させる意図は持っていない⁵。本稿において「日本」をキーワードに映画を検討することは、筆者にとって最初で最後の検討になるのではないか、と思っている。1-(2)で検討対象とした2作品では十分でないことはわかっているが、不十分さを補足する意味で、付録として「日本イメージを確認したいハリウッド映画一覧」を作成しておいた。

『投影』出版をもって映画に関する原稿執筆を断念するつもりでいた筆者が、本稿執筆を思い立ったそもそものきっかけは、次のようなことであった。日本での映画『ラスト・サムライ』大ヒットのニュースが伝わると同時に、主として若い世代の中で不十分な情報の元で、間違った映画解釈あるいはアメリカ史ばかりか日本史に関する知識に立脚しない安易な感想が、メディアやインターネット上で展開されていることに憂慮したためであった。

大学の講義や社会人講座⁶、原稿執筆等を通して、映画は単なる娯楽に留まることなく、正しい知識や豊かな教養に立脚すれば、作品を深く理解することが可能であることを発言し続けている筆者としては『ラスト・サムライ』をめぐる日本の反応に無言でいることは自らの罪ですらある、と考えるようになったためでもある。『タイタニック』（Titanic:1997）や『戦場のピアニスト』（The Pianist:2002）の例と同様、日頃はめったに劇場に足を運ばない人でも『ラスト・サムライ』を観に行つたと評判になった。本作を手がかりにハリウッド映画における日本イメージを検討した上で、ズウィック監督作品を

通してマイノリティの存在を再確認することを本稿の目的とする。

1 ハリウッド映画に描かれる「日本」という文化

(1) 『ライジング・サン』と『パール・ハーバー』の日本イメージ

【付録1：日本イメージを確認したいハリウッド映画一覧】に列挙したようなハリウッド映画に描かれてきた日本のイメージは、誤解に満ちたものであることは疑う余地はない。すでにことわったように本稿はアジア系、日系に関する検討を主目的としない。「ハリウッド映画にみるアジア人の肖像」と副題された村上由見子『イエロー・フェイス』に代表されるような業績⁷が数多く存在し、それらに委ねたいと思う。本節では、日本イメージのステレオタイプとも言える「日出ずる国」と「真珠湾」という二つをテーマとした映画2作品に限定して確認するに留めたい。

まず「日出ずる国」、つまり『ライジング・サン』(Rising Sun:1993)から見ていこう。欧州ばかりか中国から見ても、東端に位置する日本国は、太陽の昇る方向にある国、「日の昇る国」として自ら美称と解釈している⁸。アメリカ人がイメージするのは、太平洋戦争中の日本海軍の象徴、旭日旗は太陽そのものであり、真珠湾攻撃に至る日本海軍の悪しきイメージにつながるものでもあっただろう。

原作『ジュラシック・パーク』の映画化で史上最高額の映画化権料を受けたマイケル・クライトン(Michael Crichton)は、ハリウッド映画ではヒット・メーカーである。彼のベストセラーとなった原作 *Rising Sun* (1992)は、日米経済摩擦をテーマとしたミステリー小説だったが、1980年代後半から深刻になった日米経済摩擦を扱った「ジャパン・バッシング」の作品だとも解釈された。日本企業がロサンゼルスに建てたビル、ナカモト・タワーの落成式パーティで、白人娼婦が殺される事件が起こり、その捜査に乗り出す黒人刑事とショーン・コネリー扮する日本通の白人刑事という二人を中心に日米の文化摩擦が描かれている。

ハリウッド映画に描かれてきた日本イメージが、日本での我々の暮らしや

現実とは大きくかけ離れ、異質なものになっていることは、周知の事実になっているだろう。絶望と言うよりは諦めに近く、ハリウッドの人々には日本人に関して限定するまでもなく、アメリカ人以外の現実の理解の領域ではない、と考える方が無難、と筆者は思っている。

今年のアカデミー名誉賞を受賞したブレイク・エドワーズ監督作品の一つ『ティファニーで朝食を』(Breakfast at Tiffany's:1961) に登場する、オードリー・ヘプバーン扮する主人公の住むアパートの階上の住人「ユニオシ」を思い出してみよう。眼鏡、出っ歯、着物という日本人お決まりの風貌で、「戦後のハリウッド映画の中で非アジア系が演じた日本人のうち、一番滑稽で、かつ意味のない役」⁹と村上氏に表現された日系人だが、『ライジング・サン』の中では、どうだっただろうか。

日本の経済成長に脅威を感じ続けたアメリカ人が抱いた日本人イメージがスクリーンに表現されたと言っても過言ではないだろう。その象徴が旭日旗であり、映画のタイトルにもなったわけである。ナカモト・カンパニー社長のヨシダを演じていたのは、マコの芸名を持つ日系俳優である。1933年に神戸で生まれ15歳まで日本で過ごした日本人である。『砲艦サンパブロ』(The Sand Pebbles:1966) でアカデミー助演男優賞候補になった経歴を持ち、ロサンゼルスのアジア系アメリカ人劇団「イースト・ウエスト・プレイヤーズ」を率いてもいる¹⁰。自動車業界が日本車の進出で大きく打撃を受けたミシガン州デトロイトを舞台にした『ロボコップ3』(Robocop 3:1993) でも存在感のある日系企業の社長を演じていた。

この日系俳優マコが、連合艦隊司令長官山本五十六を演じたのが『パール・ハーバー』(Pearl Harbor:2001) だった。『投影』ではこの映画に関しては、真珠湾攻撃の翌日に参戦を決意したフランクリン・D・ローズベルト大統領に関してのみ言及した。多くの日本の若者の涙を誘ったこの映画を、本稿で検討したい『ラスト・サムライ』同様には受け止めることができなかった。前半のラブストーリーは不愉快でしかなかったし¹¹、後半の太平洋戦争勃発に至る日本海軍の真珠湾攻撃の場面では、合衆国側からの視点となり、日本

兵の描き方がステレオタイプでしかなかったことが不満だった。

特に、マコ扮する山本五十六は、風林火山の吹き流しを旗印とした武田信玄の時代かと思間違えるようなセットに登場した。多くの吹き流しが風にたなびく屋外で作戦会議をしていた場面では苦笑せずにいられなかった。不愉快きわまりない映画の仕上がりだったと思う。だが、当人の日系俳優マコにとっては「第二次世界大戦を扱ったこれまでのハリウッド映画では、常に日本が悪者になっていた。・・・この映画は、日本側にも理由があったことを描いている」¹²と好意的に受け止めている。ハリウッド映画界で長くアジア系として憂き目を見ながらも、不屈の精神でアジア系俳優の地位向上に努力しているマコにしてみれば、『パール・ハーバー』は「まだ許せる」映画だったと言えることなのだろう。

(2) ライシャワー教授の弟子ズウィック監督作品『ラスト・サムライ』ハリウッド映画が表現してきたこれまでの日本イメージは、『ライジング・サン』や『パール・ハーバー』に限ったことではなく、『ティファニーで朝食を』のユニオンほどではないにしろ、不愉快なステレオタイプに満ちていた。では本稿で対象とする『ラスト・サムライ』はどうだろうか。富士山や桜の誇張表現が滑稽だったとは言え、明治維新の日本に近づく努力が認められる映像とはなっていた。

黒澤明監督の『七人の侍』(1954)をズウィック監督が初めて見たのは、17歳の時だったという。「あのたった1本の映画の中に、物語や登場人物の展開、アクションの撮影法にテーマの脚色法など、監督が学ぶべきすべてのことがある。私は黒澤の映画を一本残らず研究しようと決意した。当時は知る由もなかったが、それで私はフィルムメーカーの道を歩むことになった」¹³と監督は語っている。

ハーヴァード大学進学後には、後のケネディ、ジョンソン両政権の駐日大使となるライシャワー教授から日本文化を学んだのだった。「僕が日本の文化について勉強したのは、大学生の時が初めてだったんだけど、今でも歴史家

と交流があって、本作を作るにあたって彼らに色々とアドバイスしてもらったし、沢山本も読んでいる。セットには実際歴史家が来て、間違いがないか確認してもらっている」¹⁴と自信を持って監督が語るように、彼の生涯の夢が『ラスト・サムライ』として結実したと言っても過言ではないだろう。

ここ数年のハリウッドでは、2000年アカデミー賞外国語映画賞受賞作『グリーン・デスティニー』(Crouching Tiger, Hidden Dragon:2000) や『バトル・ロワイヤル』の深作欣二監督へのオマージュとしてクエンティン・タランティーノ監督¹⁵ が作った『キル・ビル』(Kill Bill:2003) のような、アジアや日本を題材とした映画がブームとはなっている。だが『ラスト・サムライ』がそのブームに乗って登場したわけではないことはすでに明らかだろう。ズウィック監督の長年の想いが、より確実な時代考証によって従来のステレオタイプから脱却させたと言えるだろう。

(3) 新渡戸稲造『武士道』から知る「名誉」

侍とは「昔、公家に仕え、その身の護衛を仕事とした人」のことで、武士とも呼ぶ。「武道によって主君に仕えた」とされ、彼ら独特の倫理意識を「武士道」と称した。『ラスト・サムライ』主演のトム・クルーズやズウィック監督が繰り返し読んで、日本の魂だと解釈したと言われる新渡戸稲造の英文書『武士道』(*Bushido: The Soul of Japan*, 1899) の翻訳が、映画公開のお陰で書店で平積みされるほどの売れ行きらしい。何種類も現代口語訳が出版されているが、1937年初版の矢内原忠雄訳(岩波文庫)で読むことのできる日本人でありたいと思う。新渡戸の顔は、五千円札で確認できる。

1862年に南部藩士の子として盛岡に生まれた新渡戸は、1877年札幌農学校に2期生として入学し、クラーク博士に感化された1期生の影響を受け、内村鑑三たちと共にキリスト教に入信した。81年に札幌農学校を卒業して、83年には東京大学に入学したが、学問的水準に失望して1884年に渡米した。ジョンズ・ホプキンス大学で経済学や歴史学を学び、宗教的にはクエーカーに共鳴して、86年には信者となった。88年にドイツに渡り、90年には博士号を取

得後翌年にはフィラデルフィアで同じクエーカー教徒のメアリーと結婚した。

札幌農学校教授として帰国したが、病氣療養のため滞在中の合衆国で、1899年に英文書『武士道』を出版したのだった。第一版序の中で新渡戸自らが述べているように、ドイツ留学中にベルギーの法学大家との会話で「宗教教育のない日本」のことに驚かれた事実、「宗教なし！ どうして道德教育を授けるのですか」と繰り返し問われたことへの返答として執筆したのだった。またアメリカ人の妻からも、日本の思想や風習に関してその理由をしばしば質問されたことへの返答にしたかったようである。新渡戸自身が『武士道』執筆によって「封建制度および武士道を解することなくんば、現代日本の道德観念は結局封印せられし巻物であること」を確信するのであった¹⁶。

日本の道德、倫理觀の中心に武士道の精神が生きていることを指摘したこの著作は、出版当初から欧米で大きな反響を呼んだのだった。その内容を目次で確認しておきたい。英文に加えて、矢内原訳を並列させておく。

Introduction by William Elliot Griffis in 1905

緒言

| | | |
|------|---|-------------|
| I | Bushido as an Ethical System | 道德体系としての武士道 |
| II | Sources of Bushido | 武士道の淵源 |
| III | Rectitude or Justice | 義 |
| IV | Courage, the Spirit of Daring and Bearing | 勇・敢為堅忍の精神 |
| V | Benevolence, the Feeling of Distress | 仁・惻隱の心 |
| VI | Politeness | 礼 |
| VII | Veracity and Sincerity | 誠 |
| VIII | Honour | 名誉 |
| IX | The Duty of Loyalty | 忠義 |
| X | The Education and Training of a Samurai | 武士の教育および訓練 |
| XI | Self-Control | 克己 |
| XII | The Institutions of Suicide and Redress | 自殺および復仇の制度 |
| XIII | The Sword, the Soul of the Samurai | 刀・武士の魂 |

| | | |
|------|------------------------------------|------------|
| XIV | The Training and Position of Woman | 婦人の教育および地位 |
| XV | The Influence of Bushido | 武士道の感化 |
| XVI | Is Bushido Still Alive ? | 武士道はなお生くるか |
| XVII | The Future of Bushido | 武士道の将来 |

紙幅の都合上、ここで『武士道』の詳細に立ち入って検討することはできないが、「緒言」を書いているウィリアム・グリフィス（William Elliot Griffis:1843-1928）に関して説明を加えておくことは、新渡戸理解のためには有益であろう。グリフィスは1870年に「お雇い外国人」[日本の近代化指導のために明治政府に雇われた諸外国からの教師のこと]として来日し、越前福井藩の藩校で理学などを教えた後、明治の廃藩置県の大変動を目撃した。72年から東京大学の前身である南校で教鞭を執り、明治天皇に拝謁する機会をもった。74年に帰国後、牧師をしながら『皇国』（*The Mikado's Empire*, 1876）や『ミカド』（*The Mikado: Institution and Person*, 1915）に代表されるような日本に関する書物を著して、日本学者の先駆者となった人物である¹⁷。

緒言が書かれた1905年の時点で、グリフィスは新渡戸と15年以上の知己であると述べている。さらに自らの日本体験を踏まえて、新渡戸の著書の主題とする問題とは、45年間の関係を有するとしている。「お雇い」として日本に渡る10年前の1860年、日本の年号で言えば、万延元年がグリフィスと日本人との最初の出会いであった。日米修好通商条約本書批准交換のために渡米した「万延元年遣米使節団」と彼はフィラデルフィアで会っていたのだった。江戸幕府からの使節の人々と会った印象をグリフィスは「彼らの守った理想および作法の掟は武士道であった」と表現した¹⁸。

古今東西を問わず重んじられる「名誉」に加えて、「情け」や「語らずして行う」という日本の魂に強く惹かれたというクルーズの言葉¹⁹を、現在の日本人はどう受け止めたらいいのだろうか。加えて、出版から105年を経て、映画『ラスト・サムライ』がきっかけで、日本文化のひとつのルーツでありながら、第二次世界大戦以降、否、高度成長期以降の新たな日本文化の産物で

ある多くの若者には異文化でしかないであろう『武士道』がブームになっている日本の今を考えたい。自衛隊イラク派遣との関係で、さらに3-(3)で発展した議論をするつもりでいる。

グリフィスの言葉通り新渡戸の『武士道』が、「アングロ・サクソン国民への重要なメッセージたるにとどまらず」、「この世紀[20世紀]の最大問題、すなわち東洋と西洋との調和と一致の解決に対する著しい寄与」となり得たのかどうか、21世紀を迎えた日本人は真摯に考えるべき時に来ていると思う。

2 ズウィック監督作品から読む人種意識

(1) 騎兵隊後遺症の名誉回復映画『ラスト・サムライ』

新渡戸が生き、グリフィスが目撃した江戸時代から明治への転換期は、日本で昨今注目の時期にもなっている²⁰。本年2004年が日露戦争開戦百周年にあたっていることもあって、明治時代再考もブームになっている。文化よりも文明を重視する、まさに文明開化の時期に時代の流れに大きく抵抗しようとした人々を描いた映画が『ラスト・サムライ』ではなかったのだろうか。

明治初期の日本に残った最後のサムライ、勝元盛次を演じた助演男優、渡辺謙の演技に気を取られて、主演のアイルランド系アメリカ人である「お雇い外国人」ネイサン・オールグレンが何者なのか、を理解できないまま、涙した若い世代が多かったかもしれない。政府側の指導者として戦いに参加しながら、反乱土族勝元の捕虜となり、勝元の村で共に暮らすうちに自己を回復していくオールグレン自身も、勝元同様、最後のサムライであったことをどう解釈したらいいだろうか。

南北戦争時、北軍の英雄であったオールグレン大尉は、1876年建国百周年に浮かれるサンフランシスコで、明治政府の要人によって日本帝国陸軍の教育に携わる「お雇い」の依頼を受けたとき、自暴自棄のアルコール依存症となっていた。そうだった理由は、南北戦争後に大西部において展開された先住民[1492年以来コロンブスによって「インディアン」と間違っって呼ばれた人々のこと]討伐に騎兵隊の一員として加わり、不本意ながら先住民虐殺を

繰り返したことが精神的なトラウマになっていたためであった。

来日後、明治天皇から先住民とはどのような人々か、と問われると「誇り高い人々」と応えたり、勝元からオールグレンの上官であったとされる第七騎兵隊のカスター中佐〔南北戦争で戦功拔群の後、対先住民戦争に従軍し、スー族とシャイアン族の連合軍討伐において1876年6月部隊共々全滅した。現在では先住民抑圧の悪しきシンボルとされる。〕のことを聞かれると、「名声におぼれた汚い奴」(He was arrogant and foolhardy.)と罵ったりする場面から彼のトラウマを知ることができる。オールグレンは、捕虜でありながらも自分の意志で明治政府に抵抗する反乱土族側に立って、彼らを援助し共に戦うことによって、自らの名誉を回復していくのであった。

(2) 対先住民政策抗議映画『レジェンド・オブ・フォール』

1960年代までハリウッド映画では悪役として描かれ続けた先住民は、合衆国がまだ英領植民地であった17世紀以来、白人達との抗争の結果、住む場所を追われ大西部へ追いやられた歴史を持つ。さらに19世紀末には白人達との最終決戦の結果、部族解体の道を強いられたのだった。最終決戦の過程で先住民を虐殺した事実は、オールグレン大尉にとっては、自らの名誉を失うほどの屈辱であった、という設定になっている²¹。

『ラスト・サムライ』のズウィック監督の作品に『レジェンド・オブ・フォール』(Legends of the Fall:1994)があるが、物語の軸となる父親の設定がオールグレン同様で、父親は懺悔の意味を込めて、退役後モンタナの大自然で先住民家族と共存する生き方を選んでいった。19世紀後半、第七騎兵隊の大佐の頃に先住民虐殺をした父親は、自然の中で先住民の家族とともに暮らすことを選んで、3人の息子とともに、牧場を持っていた。父親は過去の記憶を忘れたかったのである。牧場に迷い込んだ野生の馬を見て、ブラピ扮する次男のトリスタンは叫ぶ。「スタッフ、君の友達だよ」スタッフとは同居しているクリー族の先住民の男性で、トリスタンには父親同様の存在だった。この台詞の字幕には「野生の馬だ」とある。先住民の価値観を入れてほしかった。先

住民の価値観で育った野生児のようなトリスタンと大自然との関わりを軸にモンタナの大自然が伝説へと変わっていくのだった。

3人の息子たちが第一次世界大戦に従軍した結果、婚約者のいる三男だけが戦死した。死んだ弟の魂を連れ帰るために、トリスタンは先住民の儀式に従い、三男の心臓を持ち帰っていた。三男の婚約者スザンナは、戦地へ行った婚約者の帰りを待ちながら、牧場に残っていた。

牧場内にいる間は、先住民と家族が共存するが、一步外へ出ると、先住民差別があることがせりふに表現されていた。スタップが娘イザベル2を学校へやるのをいやがる理由として、「学校では差別がある」というのだった。「教育が何の役に立つのか」というスタップの言葉にスザンナは、「豊かな一生が送れる」と答えて、イザベル2の教育を預かるのだった。

豊かな教育のおかげで立派な女性に成長したイザベル2は、後にトリスタンの妻になるのだった。禁酒法時代に酒の密売を生業としたトリスタンとともに出かけた帰り、警察の威嚇射撃の流れ弾に当たってイザベル2は命を落としてしまうのであった。映画でイザベル2の役を演じた女優は、ラコタ・スー族出身の母を持つ先住民の女優だった。

『レジェンド』は全くのフィクションではあったが、以上のような随所に先住民の視点を確認できる、ズウィック監督作品であった。

（3）南北戦争第54黒人部隊映画『グローリー』

『ラスト・サムライ』の主人公ネイサン・オールグレンが、南北戦争の英雄だったことはすでに繰り返したが、ズウィック監督作品に南北戦争そのものを描いた映画がある。リンカン大統領による奴隷解放宣言が出された翌月、1863年2月に北部マサチューセッツ州ボストンで、初めて黒人志願兵だけで組織される部隊が結成された。第54部隊の隊長は若き白人指揮官、ロバート・グールド・ショー大尉（Robert Gould Shaw）だった。この史実に基づいた映画が『グローリー』（Glory:1989）である。

主人公は若干25歳で指揮官となるショー大尉だが、彼の指揮する第54部隊

は、黒人とは言え、北部出身の自由黒人ばかりではなく、南部の農園から逃亡してきた逃亡奴隷が多かった。住む場所もなく、食事と軍服目当ての者がいることも事実であった。南部に残してきた肉親たちに自由を与えるために、戦争に参加して北軍が勝利することが彼らの念願であった。

部隊のリーダー格のローリンズ (Rawlins) を演じたのは、今やハリウッドを代表する名俳優ともなったモーガン・フリーマン (Morgan Freeman)²² だった。また白人を心から憎むトリップ (Trip) を演じて、アカデミー最優秀助演男優賞を受賞したのはデンゼル・ワシントン (Denzel Washington) だった。2002年に男女優のダブル受賞で話題となった²³ 最優秀主演男優賞も『グローリー』以来13年目に受賞した演技派である。二人の黒人男優が現在ほど有名になる前にも、確かな演技をしていたことが確認できる映像になっている。

ズウィック監督のマイノリティに対する視点を確認できる場面を二カ所挙げておきたい。いずれもデンゼルの演技が光る場面になっている。後述する『戦火の勇気』(Courage under Fire:1996)、『マーシャル・ロー』(The Siege:1998) のいずれでも監督がデンゼルの主演させたことが十分納得できる。

まず、デンゼル扮するトリップが、脱走の容疑でむち打ちの刑に処せられる場面である。むちを打つべく上着を脱がせてみて、ショウ大尉は息をのんだ。トリップの背中では、南部で奴隷だった頃に受けたむちの傷で被われていたからだ。脱走したわけではなく、黒人兵士には支給されない靴を街まで買いに出かけたただだったトリップが、奴隷だったとき同様の罰を与えられと言う事実に、悔し涙を流した場面は印象的だった。

もう一カ所は、難攻不落の南部の砦であるワグナー砦での決戦を明日に控えた夜の場面だった。第54部隊の兵士たちは戸外で焚き火を囲みながら、聖書の言葉を歌にして歌う、まさに教会の礼拝にも似た祈りの宴を催していた。「明日の戦いでたとえ死んでも、人間として兵士としてアメリカ合衆国に殉じるのだから悔いはない」とローリンズは語り、トリップを呼び出し「何か話せ」と促すのだった。戸惑いながら、訥々と語り始めるトリップの口から「54部隊は自分にとっては家族だ」という言葉が出て、涙するのだった。彼らの

口々に歌われるのは黒人霊歌であり、後のゴスペルでもあった。

ボストンのシティ・ホールの通りを挟んだ向かいには、第54部隊を讃えた大きなレリーフ（ブロンズ製なので兵士の肌の色は強調されない）が誇り高く飾られている。映画の最後にもこのレリーフが映し出されていた。黒人兵士たちのグローリー、つまり栄光の象徴とも言えるが、多くの観光客がこのレリーフの前に立ち第54部隊の史実を確認できる。旅人の理解のために映画『グローリー』も一役買っていることだろう。

白人の利害戦争の側面をもった南北戦争を、北軍の黒人部隊の視点から描いたズウィック監督の南北戦争観を確認しておきたい。『ラスト・サムライ』の時代考証と同時期で、監督にとって最も興味深い19世紀後半という時期への関心は、すでに『グローリー』に始まっていたと言えるだろう。

3 ズウィック監督の世界を見る「眼」

（1）湾岸戦争のハリウッド初映画化『戦火の勇気』

28カ国が湾岸に軍隊を送り、平和的解決のため努力したがだめだった。フセイン大統領を武力で追い出すしかない。／イラクに対する攻撃が始まった。戦争だ。／この戦争における我々の目的ははっきりしている。／イラクはクウェートからただちに無条件で撤退すべきだ。クウェート解放は最終局面にある。／私は地上戦を含む全ての戦力を使ってクウェートからイラク軍を駆逐するよう命じた。

2003年3月から4月にかけて起こった「イラク戦争」から1年が過ぎ、サダム・フセインの身柄拘束は叶ったものの、大量破壊兵器は発見されなかったことが明らかになった2004年春に、上記のようなメッセージを活字で読むと、いつ、どこで、誰によってなされたのか、しばし考え込むかもしれない。このスピーチは、映画の冒頭に流されたニュース映像の字幕で、その映画とは、本稿で扱うズウィック監督第4番目の作品『戦火の勇気』である。

「イラク戦争」から12年前の1991年1月に、現大統領W・ブッシュの父親が大統領として始めた湾岸戦争のドキュメンタリー・フィルムが映画の冒頭に用いられていたのである。湾岸戦争を題材にした最初のハリウッド映画が『戦火の勇気』だった。数年後には、日本の報道では全くと言っていいほど知られることのなかった、米軍のほぼ一方的な攻撃だった湾岸戦争の実像に迫ろうとした『スリー・キングス』(Three Kings:1999)が作られた。湾岸戦争が「イラク戦争」の前哨戦として多くの問題を含む戦争だったことは間違いない。では、何が問題だったのだろうか。

映画の筋を追っておく。湾岸戦争で味方の戦車を誤射して親友を死なせてしまったサーリング大佐(デンゼル・ワシントン)は、ワシントンのペンタゴン(国防総省)に戻って事務職に転属されていた。彼に命ぜられた仕事は、女性で最初の名誉勲章候補者、ウォーデン大尉(メグ・ライアン)が戦死した事実を調査するというものだった。不時着したヘリコプターの乗員を命を懸けて救い戦死したとなっている事実の確認であった。

サーリングはウォーデンの部下たちに聞き取りをしていくが、その証言は口々に異なって、何が事実かを確認していく、と言うサスペンスの趣をもつ映画である。同じカットで約3通りもの異なった演技をするウォーデン大尉を見ながら、観客は戸惑いながら推理することを余儀なくされる。黒澤明監督の『羅生門』にヒントを得た作風だと言うことは容易に想像できる。黒澤作品がズウィック監督に与えた影響は1-(2)ですでに述べた。

湾岸戦争はCNNの中継を通して世界中で、まるで戦争ゲームを見るように目撃された。「砂漠の嵐」作戦と命名された戦争で、米軍の戦死者は150人程だったが、イラク側は軍人だけで少なくとも10万人は死んだ。イラク兵の死者に至っては膨大な数で正確な人数を把握できなかったという。しかも米軍の死者150人のうち、友軍の誤った攻撃によって死亡した約40人が含まれている。湾岸戦争研究では、戦争ではなく「殺戮」との評価もあるらしい²⁴。

「米軍同士の誤った殺し合い」は湾岸戦争の一側面を象徴していて、まさに『戦火の勇気』のテーマだった。誤射で親友を死なせた大佐が聞き取りしたの

は、戦場の兵士たちが最も恐れたのはイラク軍ではなく、実は味方の誤った攻撃だった、という事実である。ベトナム戦争を経験して以来、戦争を美化する映画よりもむしろ戦争の問題点を明らかにしようという問題作が作られてきたハリウッドだったが、ズウィック監督の『戦火の勇気』製作意図にもそうした側面があるだろう。

(2) 「9月11日」 予告作品『マーシャル・ロー』²⁵

2001年9月11日の事件、日本の報道では「米国同時多発テロ」と称されている「あの」事件は、英語では“September 11th”としか表現しない。他の表現を持とうとしないかのように、その日付で呼ばれる。映画『パール・ハーバー』で言及したように、アメリカ人は、屈辱の日(The Day of Infamy)を“December 7th”と呼んだことにも通じる呼称であろう。

「9月11日」の犯人たちを称して「テロリスト」²⁶とする。彼ら自身も亡くなったので、いわゆる「自爆テロ」と呼んだ方が正確かもしれない。なぜ自らの命と引き替えにテロ行為に出るのか、という疑問がズウィック監督に1本の映画を作らせたのだった。原題は「包囲攻撃」を意味する“The Siege”で邦題は『マーシャル・ロー』となった。“Martial Law”とは戒厳令のこと、非常事態が起きたときに軍隊が権限を行使することを意味する。この映画の場合の非常事態とは、イスラム教徒の「テロリスト」がニューヨーク市内各地で次々と「自爆テロ」を起こしたことだった。

「9月11日」直後のメディア報道では「なぜテロリストはアメリカを狙ったか?」という問いかけがなされ続け、ジャーナリストたちが口々に持論を展開していた²⁷。直後の即席の解答では十分でないことは当然だろうが、3年近く経とうとする現在でも正解が提示されているとは思えない。事件直後のアメリカ社会での規制に関しては、ラジオ放送音楽の例があった²⁸。日本国内でも暗黙のうちに様々な自主規制が働いていた。わかりやすい例として、テレビ局が放送予定していた映画のなかで、事件を連想させるような内容の映画は違う内容の映画に変更されるということが起きた。

ハリウッド映画にはテロリスト映画は多く存在した。IRAを描いた『デビル』(The Devil's Own:1997)、空のホワイトハウスが主人公の『エアフォース・ワン』(Air Force One:1997)では乗っ取り犯人はカザフスタンの独裁者の解放を要求したテロリストだった。えせテロリストに3回にも渡って拘束されるニューヨーク市警(NYPD)を主人公にした映画が『ダイ・ハード』シリーズ3部作(Die Hard:1988, 1990, 1995)で、核兵器上問題があった『トゥルーライズ』(True Lies:1994)の主人公は、対テロ諜報部員だった。日本ではこれらが放送中止の対象となっていた。枚挙にいとまがないほど、ハリウッドはテロリスト映画を作ってきたが、なかでも『マーシャル・ロー』は「9月11日」3年前の製作ながら、事件を予告するような内容の映画だった²⁹。

エドワード・ズウィック監督が『マーシャル・ロー』を製作しようとしたきっかけは、1993年に起こった世界貿易センタービル地下駐車場爆破事件に大きな衝撃を受けたためだった。テロ事件と背後にある問題をテーマにした映画製作を考えて、取材と調査を続けて完成したのは93年の事件から5年後の1998年だった。日本公開は2年遅れの2000年であった。

FBIとNYPD合同のテロリズム対策本部長アンソニー・ハバード³⁰が、ブルックリンで起こったバス・ジャックの自爆テロの犯人を追及する段階で、主犯と思われるアラブ青年サミールを突き止めた場所で会うのは、CIA女性捜査官エリスだった。さらに自爆テロが防ぎようがなくなった頃に陸軍幹部、ウィリアム将軍が乗り込んできて戒厳令を敷き、ブルックリンを軍の支配下におくのだった。アメリカ側の三者三つ巴に加えて、「テロリスト」のアラブ青年の主張が注目に値する。

CIAは中東某国のスパイ網を管理していて、スパイ活動に必要な技能を訓練していたとされる。そのCIAに見捨てられた彼らが、皮肉にもCIAから教わった技術を生かしてテロ活動をしている、と言う設定である。監督による十分な取材結果が結実した作品で、事実により近いと思われる。実際、W・ブッシュ政権が血眼になって探しているオサマ・ビンラディンにしても、やっと身柄確保に成功したサダム・フセインにしても合衆国CIAの教育の産物

だと言っても過言ではないだろう。

サミールがテロ組織の幹部として優遇される理由は、彼の弟が自爆テロで亡くなった恩恵だった。サミールが弟の死について次のように語る。「^{シーク}首長曰く、アラーへの死は美しい。任務を果たせば両親は安楽な暮らし、お前には天国で70人の処女を、と」「そこで弟は10本のダイナマイトを胸に巻き付け、映画館へ。それで俺はVIP」と。^{シーク}首長の言葉に従った若者は、アラーのための「美しい死」を選んだ、ということらしい。「9月11日」の犯人グループの「テロリスト」たちも世界貿易センタービル、ペンタゴン、ペンシルベニア州でそれぞれの命を散らしていったのだろうか。

「中東の人々は最悪の環境で生きてる素晴らしい人々」と語るのは、バイルートのアメリカ大学を卒業したという設定のCIA女性捜査官エリースだった。「イスラム過激派だけが敵、過激はいけない」と一般民衆の貧困や劣悪環境の実態を知りつつ、彼らへの愛情を表現したエリースに対して、テロリズム対策本部長ハバードは、「冷戦終結で君らCIAは失業、アフガニスタンは過去、ここ(NY)を中東と混同するな」と言うのだった。「9月11日」予告映画と言われても仕方がないような、ゾッとするせりふである。CIAの大敵ソ連のアフガン侵攻は確かに過去のことだが、その伏線の元に「9月11日」直後のアフガン攻撃があった事実を目撃した我々には、『マーシャル・ロー』の提示する問題は余りに大きく、深刻である。

政治目的を持って実行される暴力を「テロ」とするために「報道されないテロはテロではない」、すなわちメディアを通して自分たちのメッセージを社会破壊行為という形で見せつけることこそ「テロリスト」の特徴だろう。「9月11日」という「テロ」行為を、我々はメディアを通して目撃したのだから、彼らの計画は大成功したことになる。こうした「テロリスト」の手段を『マーシャル・ロー』は教えてくれる。ブルックリンで起こった最初のバス・ジャック「テロ」において、地上では報道のカメラが回り、空中にはヘリコプターが飛び始めたときに、エリースは「大変！」(Oh, My God!)とつぶやく。さらに「テロリスト」は本気だから自爆「テロ」でバス乗客の犠牲を出す前

に射殺するように FBI に助言したのだが、アラブ語が話せる捜査官を介して「交渉」にあたっている最中にバスは吹き飛ぶのだった。

市内の連続テロが、捜査本部のあるビルを襲い600人が死亡するに至って、映画のなかの大統領は「新しい形の戦争」として緊急事態宣言を出したのだった。軍隊出動が要請され、ブルックリンにやってきたのが陸軍幹部、ウィリアム將軍だった。彼の口からも「新しい戦争」という言葉が聞かれた。「9月11日」直後にW・ブッシュが同じ言葉を口にしたとき、筆者はすぐにこの映画を思い出したが、ハリウッド映画に慣れたアメリカ民衆はすでに予測できていたと言うことになるのだろうか。

アラブ人解釈に関して、映画のなかでも「アラブ人（イスラム）＝テロリストではない」とか「テロはコーランに反する」「イスラムは寛容な宗教である」といったメッセージを出して、ステレオタイプになることを避ける努力はなされていた。戒厳令下にあるブルックリンで、アラブ系市民は自分たちに対する弾圧だとしてデモを始めるが、結局アラブ系市民は自宅を閉鎖され、強制収容されることになる。いわば「アラブ人狩り」が展開されるのだが、日本人観客としては真珠湾攻撃直後の日系人強制収容のようで、アラブ人たちへ思い入れして見てしまう場面でもあった。

1993年の世界貿易センタービル地下駐車場爆破事件は、今とものなれば「9月11日」の序章でもあったようだが、『マーシャル・ロー』誕生の契機ともなった上に、映画が予告編とも言える結果になってしまったわけである。イスラムばかりを射程において「9月11日」を考えることは、結果ばかりを追うことになり、原因を見過ごすことになることは誰もが知るところだろう。対峙すべきは他にあることを自覚する。

合衆国内でかつて差別の対象としてきたカトリックとユダヤ教を抱え込む形で、現在はユダヤ・キリスト教的伝統に基づく国家に変化したと言っても過言ではないだろう³¹。イスラエルで対立する二者のうち、ユダヤ寄り路線を取り続ける合衆国に対して、イスラム教徒たちが納得できないことは誰もが理解できる事実だろう。イスラム社会に内在する貧困、民族対立、あるいは

は無視されるかのような女性差別、と早期解決が望まれる諸問題に関して、直視することを避けるかのように、利害対立ばかりが強調されて、「テロ」を引き起こす結果となっている。

「諸悪の根源」はブッシュ政権が「ロード・マップ」を提示しているイスラエル問題であり、ユダヤ問題解決なくしてイスラム問題の解決を望むことは難しい。建国以来WASP主流であったプロテスタント国家、今はユダヤ・キリスト教的アメリカ合衆国は、今その寛容性が問われていると言えるかもしれない。兄弟宗教であるはずの三つの宗教が、互いに兄弟に対してどの程度、寛容性を見せられるか、「哀しみを怒りに」³²ではなく「哀しみを優しさに」変えることができるかどうか、その懐の深さが問われてもいるのではないだろうか。

『マーシャル・ロー』製作に取りかかるまでのズウィック監督の調査報告が映画パンフレットにメッセージとして載せられていて、非常に興味深いが、その一部をここに紹介しておきたい。「これまで作られた、多くのテロリストたちのアクションを見せるだけの映画を作る気は僕にはなかった。この映画は我々自身の話なのだ。我々は何者で、どういう人間でありたいと願うのか、みんなに大事な問題を投げかけている。」³³

（3）明治維新・富国強兵から自衛隊イラク派遣まで

世界を見る「眼」をもったズウィック監督が、「9月11日」を経て世に送り出した『ラスト・サムライ』から、我々日本に暮らす者たちは何を学習していけばよいのだろうか。2-(1)でも言及したように、日露戦争開戦百周年の本年、『ラスト・サムライ』を契機に、日本人として考えるべきテーマは多い。新渡戸が説いた「名誉」が現在の日本の誇りとなり得ているのか、明治維新という画期以来日本がめざしたもので現在までつながるものはあるのか、など、すでに本稿での検討にも通じる部分はあるだろう。

本年元旦の朝日新聞の文化欄に、現在の日本を代表する文化人二人の対談が載っていた。評論家の加藤周一氏(1919年生まれ)と哲学者の梅原猛氏(1925

年生まれ)である。大見出しは「日本の誇り 軍より京都」となっていて、加藤氏の提案は「未来への道、アジアでの国際協力に」であり、梅原氏は「仏教の倫理観、日本人の根底にある」と主張する。自衛隊イラク派遣という重苦しい年明けに、これからの日本が「何を背骨にすえ、どこを目指せばいいの」かを大きな問題提起とした対談であった³⁴。

「9・11以降、国連とアメリカとの食い違いが大きくなる中で、日本は対米協力を国際協力とすりかえた」と加藤氏は日本の立場を非難しながら、そうした姿勢の源を明治維新ににおいている。維新以降富国強兵を掲げた日本は、「強兵」で成功して大国ロシアと戦争できるまでになった。「富国」は第二次大戦に敗戦して以降「食うや食わずから、経済規模で世界2位になった」後、どうすればいいのかわからなくなっている、と指摘する。

梅原氏は、日本史の中で平安時代の300年間、江戸時代も同様に、戦争をしなかった、と指摘して、明治以降経験してきた多くの戦争は日本の伝統ではないことを強調する。現在の憲法は合衆国の押しつけ、と言われるが、本来日本は長い平和主義の伝統に乗っていた、として現在の憲法を支持している。戦争反対に関しては加藤氏も賛成し、「戦争は命を壊し、文化を壊し、しかも民主主義を壊す」と、戦争を避けることを理想とする。

両氏が唱えるように、日本人が明治時代どころか、江戸、平安とその歴史をさかのぼりながら、21世紀の世界のあり方に提言できるのなら、「自衛隊イラク派遣」という事態を招くことはなかったことだろう。江戸から明治へとという転換期に対して『ラスト・サムライ』という映像を通して思いを馳せることができるなら、あるいは五千円札を無意識に使うのではなく、お札を通して新渡戸の『武士道』に思いを馳せることができるのなら、これからの日本のあり方にも展望を描くことができるだろう。

2004年3月11日に起こったスペイン、マドリードでの列車同時爆破テロは、事件直後には、スペインのマイノリティであるバスク独立を掲げる武装組織「バスク祖国と自由」(E T A)による犯行とされた。実際は「9月11日」の犯人グループとされるアルカイダがらみの犯行であった。テロ撲滅を唱える合

衆国の支持国として早々に名乗りを上げていたスペイン大統領が選挙に敗北した事実を我々は目撃した。

スペインと同列に合衆国を支持している日本もアルカイダの標的になっていることが報道されて、首相や外務官僚によって「テロを覚悟せよ」とか「人混みには出るな」といった無責任発言がなされている。戦争放棄を掲げる憲法を持つ国家が国際社会とどう向き合うか、が国民レベルで曖昧になっている現在の日本は、これからどういう方向に向かうのだろうか。『ラスト・サムライ』大ヒットといわれる世相を眺めながら、映画を見ながら沸々わき上がった複雑な思いは、本稿を脱稿しようとする現在、さらに複雑になってしまった。

おわりに

世代を越えて多くの日本の観客を魅了した『ラスト・サムライ』は、ズウィック監督の仕事上で、これからどう位置づけられていくのだろうか。本稿で筆者は過去における彼の4作品との関係で、「マイノリティ」という視点を提示した。黒澤作品から映画製作を学び、ライシャワー教授や新渡戸稲造から日本文化を吸収、解釈していった監督は、自分の夢を映画化した次の段階をどこへすすめていくのだろうか。

ハリウッド映画は「売れる」作品しか作らない、アクションや軽いテーマしか扱わない、というステレオタイプでとらえている一般的な日本人が多いのは残念なことである。政治的なテーマや、日常生活にはほとんど無縁な異文化がテーマである映画を能動的に見る機会を作らない人々も、「売れる」作品は見に行く、とすれば、そういう作品しかハリウッド映画じゃない、と思っても仕方がないかもしれない。そういう人々でさえ観に行ったといわれる『ラスト・サムライ』を学習の出発点にするような観客が多くいれば、テロの不安と向き合う日本にも希望が持てるのだが。

ズウィック監督の『マーシャル・ロー』は完全なフィクションだったが、結果的に「9月11日」の予告映画になってしまったことは3-(2)で検討した通

りである。ハリウッド映画が政治的テーマで問題作を世に問いかけた例は枚挙にいとまがない。2004年3月31日にイラクのファルージャで起きたばかりの事件は、1993年10月3日に「アフリカの角」ソマリアのモガディシオでの事件を思い出させた。事件はすでに10年以上前のことになったが、ハリウッド映画『ブラック・ホーク・ダウン』(Black Hawk Down:2001)を観てから未だ数年しか経っていない観客たちは生傷が癒えないまま、イラク報道からソマリア報道を思い出したことだろう。

1993年当時、ソマリア国家連合(ババルギディル氏族)を率いる独裁指導者アイディッド將軍は、国内のあちこちでソマリアの平和維持のために派遣された国連軍に攻撃を開始していた。襲撃、殺害の報道を受けて米軍主体の国連軍を増強してアイディッド將軍の側近逮捕作戦に出たのだった。ところが米軍のヘリコプター「ブラックホーク」が地元の武装勢力に撃墜され、救出に向かった地上部隊も含めて18名が殺された。兵士の遺体が地元住民に引きずられる写真が米メディアで報じられたのだった。議会は即時撤退を要求して、当時のクリントン政権は抗しきれずに撤退を決めたのだった。

『エイリアン』(Alien:1979)が有名で、最近では『グラディエーター』(Gladiator:2000)と同年に『ハンニバル』(Hannibal:2000)を監督したりドリー・スコット(Ridley Scott)が『ブラックホーク・ダウン』を描いている。「これは、観客に問いかける作品であって、答えを提供する作品ではない」³⁵というスコット監督の言葉は、この映画の本質を語っているだろう。

原作はベストセラー・ノンフィクションで、雑誌記者のマーク・ボウデン(Mark Bowden)の雑誌連載「モガディシオの戦い」が原型となり1999年に *Black Hawk Down* として出版された。[邦訳『ブラックホーク・ダウン:アメリカ最強特殊部隊の戦闘記録』(早川書房)]ボウデンは、この事件をルポの題材に選んだ理由について次のように語っている。「あの戦闘で死亡したアメリカ兵が、ソマリア人の手で通りを引きずり回されている映像を目にした。・・・そんな状況を潜り抜けてきた兵士たちに話を聞ければ、と思った」³⁶と。

ズウィック監督作品の検討に加えて、耳にした事件に絡むハリウッド映画

における高い政治意識の一例を確認した上で本稿を閉じることとする。

[2004年4月5日脱稿]

註

- 1 第75回アカデミー賞授賞式に関しては、次の拙稿を参照されたい。拙稿『『ボーリング・フォー・コロンバイン』の風景』猿谷要編著『アメリカよ!』(弘文堂、2003年6月) 58-65頁。拙著『スクリーンに投影されるアメリカ―「九月十一日」以降のアメリカを考える』(メタ・ブレーン、2003年10月)
- 2 今年度の外国語映画賞は、カナダ・フランス映画『みなさん、さようなら。』(Les Invasions barbares; The Barbarian Invasions) が受賞した。父の死をどう看取るか、をテーマとした作品で、2003年カンヌ映画祭で熱狂的に評価された。日本公開は2004年5月である。日本映画がアカデミー賞外国語映画賞候補になった例としては、『羅生門』(1952)『地獄門』(1955)そして本文で言及した『宮本武蔵』(1956)は最優秀賞を受賞した。
- 3 ハリウッド初期の東洋人スターであった早川雪舟の出世作となった『チート』(The Cheat:1915) 及び早川に関しては以下を参照されたい。村上由見子『イエロー・フェイス:ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』(朝日選書、1993年) 13~24頁。ナンシー梅木受賞作である『サヨナラ』に関しても村上同書の171~176頁に詳しい。
- 4 以下の拙稿一覧を参照されたい。浦和大学短期大学部紀要『浦和論叢』第31号、2003年12月、90頁。
- 5 筆者としては、映画を題材として執筆することは『投影』出版を最後にするつもりであった。実は『投影』執筆最中から、次著作は本来の研究対象であるアメリカ黒人女性史となることが某出版社との間で検討されている。本稿執筆に至る理由は「はじめに」の最後で少しは触れたが、『投影』出版が契機となって下記のような連載依頼もあるなど、映画に関する執筆断念は夢想到に終わりそうである。拙稿連載予定「ピープル・オン・ザ・プラネット〜映画で学ぶ異文化入門・アメリカ編1~3」NEC(日本電気)発行PR誌『コンセンサス』04年5/6月号~9/10月号、連載第1回のテーマは『ラスト・サムライ』である。
- 6 すでに本誌下記拙稿において社会人講座の検討は行った。「映像を通して考えるアメリカ合衆国―社会人講座を手がかりに―」浦和短期大学紀要『浦和論叢』第28号、2002年6月、137-164頁。「再版によせて」『スクリーンで旅するアメリカ』(メ

- タ・ブレーン、2002年）223頁、及び「あとがき」『投影』226頁も参照されたい。
- 7 村上前掲書、324～325頁（参考資料・単行本）。
 - 8 そもそも「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや」で始まる『隋書』に残る文章にさかのぼる。聖徳太子の発意で、607年に大和朝廷が送った遣隋使が煬帝に届けた国書に書かれていたものだった。煬帝は日本を東夷の一国と見なしていたために激怒したと言われる。自国を美称で表現することは1400年を過ぎても変わっていない例がある。イラク派遣がらみの自衛隊報道を聞いていると、「日出ずる国から来た誇り」とか「武士道の国、日本」といった表現が目立つ。そうした発言を聞くたびに、日本の大半の若者と大きく遊離した存在として自衛隊を再認識してしまうのは皮肉である。3-(3)において改めて考えたい。
 - 9 村上前掲書、85頁。
 - 10 同書、「あとがき」319-320頁。村上氏とマコ夫妻との出会いは以下に成就している。村上由見子『イースト・ミーツ・ウェスト——マコとスージーの日米物語』（1993年、講談社）
 - 11 昨年度から本校で講義を担当し始めた「比較文化」は、英語コミュニケーション科以上に経営情報科の受講生が多かった。前後期とも同じ内容の科目のはずだったが、筆者は別内容とした。前期の「原爆投下」にあたるテーマは後期には「真珠湾攻撃」とした。前期の学生たちに映画『パール・ハーバー』に関しては後期に話す旨伝えると、非常に残念がり、後期の該当回には参加したほどだった。歴史事実を知らされ、後半の攻撃開始時の場面を数分見せた講義の後に、学生からの感想を聞いてみると、単純なラブストーリーに感激した自分たちを悔いている様子だった。
 - 12 「マコが語る1941年12月8日（日本時間）」『パール・ハーバー』パンフレット。
 - 13 「監督とのインタビュー」『ラスト・サムライ』パンフレット。
 - 14 同書。
 - 15 タランティーノ監督が白人でありながら自ら黒人の意識を持った証として作った作品は、1970年代のブラックスプロイテーションの女王パム・グリアーを主人公とした『ジャッキー・ブラウン』（Jackie Brown:1997）である。詳細は以下を参照されたい。拙著『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレーン、1999年）199-205頁。
 - 16 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳『武士道』（岩波文庫、1938年初版、1991年ワイド版発行）11頁。；藤田文子「新渡戸稲造（1862-1933）」『アメリカを知る事典』（平凡社、1986年、以下『知る事典』と略記。）342-343頁。
 - 17 亀井俊介「グリフィス（William Elliot Griffis:1843-1928）」『知る事典』146頁。；「訳者あとがき」W.E.グリフィス著、亀井俊介訳『ミカド：日本の内なる力』（研究社、1972年初版、1994年岩波文庫化）339-350頁。
 - 18 グリフィス「緒言」前掲『武士道』18-23頁。

- 19 「トム・クルーズとのインタビュー」『ラスト・サムライ』パンフレット。
- 20 日本TV界での人気グループの一人が主演するNHK大河ドラマ「新選組！」放映は、昭和末期から平成初期生まれの十代の世代にも明治時代を身近な「過去」にしているかもしれない。こうした機会がきっかけとなり自らが暮らす国家の歴史に、受験勉強のためではなく自らの出自を見つめる、という視点から向き合ってほしいと願わずにはいられない。
- 21 先住民の視点からハリウッド映画を検討する試みは註4の通りすでに本誌で行い、『投影』の第2部第1&2章（58-86頁）にも組み入れている。
- 22 『ディープ・インパクト』（Deep Impact:1998）では合衆国史上未踏の黒人大統領を演じていた。ブロードウェイの舞台を経て、ハリウッドへ進出した俳優で、これまでにアカデミー賞に関して言えば主演候補には2回（『ドライビング・ミス・デイジー』1989；『ショーシャンクの空に』1994）、助演候補には1回（『NY ストリート・スマート』1987）選出された演技派である。残念ながら最優秀賞は一度もない。
- 23 詳細は以下を参照されたい。「黒人俳優とアカデミー賞：第七十四回アカデミー賞授賞式」『投影』97-110頁。
- 24 瀬戸川宗太『『スリー・キングス』：湾岸戦争の背景にあるもの』『スリー・キングス』パンフレット。
- 25 本節は「9月11日」以降のアメリカ合衆国を考えることを出版目的とした『投影』の回答（結論）とも言える第四部第四章「イスラム教を映画に学ぶ：世界に通じる強者と弱者の構図」の最終項『『マーシャル・ロー』から知る「テロリスト」の論理』（205～210頁）に加筆修正したものである。
- 26 「ある人にとっての『テロリスト』は、他の人にとっては『自由の戦士』だ」として事件直後から「テロリスト」の表現を使わなかったメディアもあった。「グラウンド・ゼロ」の表現同様に、使用することが適当でないことは自覚しながら、いわば便宜上本稿でもカッコ付きで使用するものとする。本来「テロリズム」とは、フランス革命後のジャコバン独裁による相次ぐギロチン処刑に象徴される恐怖政治に由来する言葉だった。「テロリズム」とは恐怖を手段として政治目的を果たそうとすることである。恐怖政治発生に至る経緯に関しては、次の著作が示唆に富む。遅塚忠躬『フランス革命——歴史における劇薬』（岩波ジュニア新書、1997年）
- 27 事件直後、日本の出版業界でも、イスラム関係の書籍を中心に緊急出版の洪水が起きた。玉石混淆だったと思うが、様々な書籍のなかでも次の著作からは多くを学んだ。芝生瑞和『「テロリスト」がアメリカを憎む理由』（毎日新聞社、2001年）、事件から一年半後出版の次の小冊子も事件を「持続的に考えていこう」とする読者には有効だと思う。NHKイスラム・プロジェクト『徹底討論 アメリカはなぜ狙われたのか・同時多発テロ事件の底流を探る』（岩波ブックレットNO.563、2002年）

- 28 コラム「合衆国への賛歌」『投影』55頁を参照されたい。
- 29 2000年劇場公開時点で観てはいたが、「9月11日」直後にレンタルビデオで再度確認したときには、虚像であるはずの映画が、事件にあまりに酷似していて、何度も現実報道ではないか、と疑ったほどだった。偶然にも事件数日後にWOWOW放送予定だったが、作品変更されていた。
- 30 2002年アカデミー最優秀男優賞受賞の黒人俳優デンゼル・ワシントンが演じている。『グローリー』、『戦火の勇氣』ともに複雑な役柄をこなして、ズウィック監督との縁が深いことは、2-(3)で述べた。
- 31 宗教社会学者ロバート・N・ベラが呼んだ「合衆国の市民宗教」のことを「見えざる国教」と名付けた森孝一氏の口述近著も「9月11日」以降の合衆国を考える上で有効であろう。『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身・アメリカ「超保守派」の世界観』（講談社文庫、2003年）
- 32 「はじめに」『投影』3頁を参照されたい。
- 33 “Message from Edward Zwick”、映画『マーシャル・ロー』パンフレット。
- 34 『朝日新聞』2004年1月1日、31面（文化欄）。
- 35 映画『ブラックホーク・ダウン』パンフレット。
- 36 “Interview with Mark Bowden”、同書。

【付録1】 日本イメージを確認したいハリウッド映画一覧

- 1918 桜子 (Her American Husband)
- 1919 お雪さん (A Japanese Nightingale)
- 1932 お蝶夫人 (Madame Butterfly)
- 1957 サヨナラ (Sayonara)
戦場にかける橋 (The Bridge on the River Kwai)
- 1958 黒船 (The Barbarian and a Geisha)
- 1949 硫黄島の砂 (Sands of Iwo Jima)
- 1961 ティファニーで朝食を (Breakfast at Tiffany's)
- 1966 砲艦サンパブロ (The Sand Pebbles)
- 1970 トラ・トラ・トラ! (Tora! Tora! Tora!)
- 1980 将軍 (Shogun)
- 1988 ダイ・ハード (Die Hard)
- 1989 ブラック・レイン (Black Rain)
- 1990 愛と哀しみの旅路 (Come See the Paradise)
- 1993 ライジング・サン (Rising Sun)
ロボコップ3 (Robocop 3)
- 2001 パール・ハーバー (Pearl Harbor)

【付録2】 エドワード・ズウィック監督作品一覧

- 1986 『きのうの夜は・・・』 (About Last Night ...)
- 1989 『グローリー』 (Glory)
- 1992 『フォーエバー・ロード』 (Leaving Normal)
- 1994 『レジェンド・オブ・フォール／果てしなき想い』 (Legends of the Fall)
- 1996 『戦火の勇氣』 (Courage under Fire)
- 1998 『マーシャル・ロー』 (The Siege)
- 2003 『ラスト・サムライ』 (The Last Samurai)

Summary

Minorities in the Motion Pictures by Director Zwick —from “Glory” to “The Last Samurai”—

Hiroko Iwamoto

In Hollywood movies the images of Japan, Japanese or Japanese culture have been misunderstood. There were so many stereotypes of us. The movie, “The Last Samurai” is showing Meiji-period, the epoch of Japanese history, which was the term changing our culture through Western civilization. That was not exceptionally stereotyped.

The Director of “The Last Samurai,” Edward Zwick, was very impressed by the movie, “Seven Samurai,” by Director Akira Kurosawa. Mr. Zwick also studied Japanese history and culture from Professor Reishauer at Harvard University.

The movies before “The Last Samurai” were as follows: “Glory”, showing the first black troops of the Civil War, Massachusetts # 54 troop; “Legends of the Falls”, showing the family in Montana at the turn of the 20th Century, whose father was the Colonel of the Custer’s Seventh Cavalry; “Courage under Fire”, showing the Gulf War, operation ‘Desert Storm’, in which there were friendly fire among the US Army. This movie was the first one in Hollywood showing the Gulf War.; “The Siege”, showing the relationship between the Islamic terrorists and NYPD, FBI, CIA. This movie was like a kind of imaginary scene of ‘September 11th’.

Director Zwick has developed the views to see the World affair. He has studied the history of minorities all over the world. He tried to make motion pictures of minorities from a world point of view.